
とある朝ぼけ、遅刻した日の話

つばさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある朝ぼけ、遅刻した日の話

【Nコード】

N7264V

【作者名】

つばさ

【あらすじ】

電車で登校していたら寝過ごして海についた。仕方がないので浜辺を散歩していると、クラスメイトの女子と会う。しかし彼女は普段から僕を目の敵にしている人物だった。

(前書き)

初投稿ということで、名刺代わりに一本書いてみました。
楽しんでもらえるといいな、と思っています。

「こんな所まで来てしまった……」

いつも通りの朝だった。朝食は納豆カレー、電車は7時32分の急行。いつも通りに最後尾車両の端っこに陣取った。

ただ1ついつもと違ったのは、目を覚ました時には電車が目的地を大幅に通り越して終点に到着していたこと。

車掌さんに揺り起こされて辺りを見回し、

「にゃんと……」

寝ぼけて甘噛みしてしまった事は墓場まで持って行く予定だ。

僕が高校への通学のために毎朝利用している路線は、なぜか途中から田舎の方面へ進路をとる。

西方に1キロ強の政令都市に出るためにはわざわざ乗り換えをしなければならぬのだ。

利用者にはかなり不評なシステムだが、改善される様子はない。

そういうわけで、漫然と寝こけて流されるままに終点まで流れ着いてしまった僕は駅舎の外に立っていた。

終点真砂駅まごいしは、左手に海を見れば右手には山がある——大したド田舎で、時刻表を見る限り次の電車までは2時間以上待たなければならぬ。

見やった腕時計は8時半を指して、もはや遅刻確定どころの騒ぎではない。

と言ってどうしようもないので、僕はぼろけた駅舎を出ることにした。薄暗い木造の駅舎の戸口を一步出ると、そこはすぐに海だ。

僕は浜辺に立ち、冒頭の一言に至るというわけである。

さて、春の海だ。

ばさっ、ばさっ と歩くたびに足元の砂が音を立てる。柔らかな、まだ角度の浅い朝の光りが辺りを包んでいた。

「うげっ……」

そんな声が後ろから聞こえたのは、まだまだ清々しい朝風を僕が深く吸い込んでいる途中のことだった。

振り返ってみると、見知った顔がテトラポッドの上に立っていた。それも、だるまさんがころんだの最中のような「めっかった…」みたいな、そういう体勢で。

「あれ……遠藤？」

それは同じクラスの女生徒だった。

遠藤唯加^{ゆいか}、という名の彼女は僕が世界で最も苦手になっている女子であると断言して差し支えのないクラスメイトである。

遠藤唯加はごくごく整った容貌の持ち主であるというのが、校内での統一された見解ではある。

天然で茶色がかった髪はアイロンによるところであろう毛先くりん☆で毎朝華やかな雰囲気だし、
優しい笑みを絶やさない顔には気を抜けば見落としてしまいそうなほど自然な化粧がきりん☆と常に施されて————要するに垢抜けた女子、とそういうわけだ。

加えて入学して以来の一年と一月^{ひっつき}。

その男女を問わず振りまかれる笑顔と発揮される面倒見の良さから学級委員長に推され続ける人望っぷりで、

300人近い我が第2学年のほとんどと友達（単なる知り合いにあらず）であるというにわかには信じがたい嘘のような本当の話を体現しているのである。

で。ここで問題なのは、「ほとんど友達」の「ほとんど」の中に僕が含まれてないことだ。

遠藤唯加と友達でない2年生などというのは、そもそも僕と湯島さんくらいのものであって、入学以来一度も登校して来ていない湯島さんを除けば正味の話僕一人だけということになる。

弁解させてもらえるならば、これについては何も僕の人間性に致命的な欠陥があるわけではない。

その証拠に僕も友達をそれなりに持っているし、親友とさえ呼べる相手だっている。

一方、遠藤唯加はどんな手のつけられなかった不良も自殺一歩手前だったといじめられっ子も綺麗に更正させた実績がある。

とにかくただ、遠藤唯加がなぜか僕を毛嫌いしているに過ぎないのだ。

教室で目が合う度に強くにらんでくるし（1日に30回くらい）、3日に1度は授業中にゴミを投げつけてくる（不幸なことに、僕と遠藤の席は隣り合っているのだ）。

元はノートの切れ端らしいそのゴミは丁寧な四つ折だったり女子がよく渡し合っている折り紙（？）のような形だったりするのだが、嫌がらせのためにノートのページはおろか授業の時間までごみ箱にぽーいするのだから遠藤の僕嫌いも筋金入りである。

そんな僕と遠藤の関係なので正直な話「うげっ」とか言いたいの
は僕の方なのだが、それでも人の心の機微には聡い方なので、僕は

それをおくびにも出さない。

むしろ爽やかな笑顔と共に話題を提供するくらいである。

「もしかして、遠藤も寝過ごしたの？」

遠藤に限ってそんなことはまずないのだけど、これは会話をスムーズに展開させるために必要なワンクッションなのだ。

「……………んなわけないでしょう」

だからリアクションが酷くても僕は泣かない。絶対に泣かないぞ。いつもの事だしな。

ゆるゆるとひょうきん⇒直立へと体勢を直しながら、遠藤はそう答えた。

「……あんたこそ寝過ごしたんでしょう、姫野。いつもぼーっとしているもの」

「はは……まあ、ね……」

返す刀で痛いところを突かれて、僕は曖昧に微笑んだ。ちなみに、姫野とは僕の名前である。

「……………」

「……………」

沈黙。ざざーん、と波の寄せる音がやけに大きく感じた。

そもそも普段話すこともない………というか苦手になっている相手のことだ、共通の話題なんかない。

そもそも目が合ったら睨にらまれるわけで、出来るだけ僕は彼女を視界に入れないようにして日々を過ごしているのだ。

不意に目に入ってしまったたり凄く視線を感じるからそっちを見たら遠藤が睨にらんでいるところだったり、というイレギュラーを除けば僕らの接点は席が近いとかそのくらいしかない以上、こんな状況に放り込まれてどうしろというのかと問いたい。

……いや、待てよ。

もしかするとこれはチャンスかも知れない。

海で二人きりという状況は、字面じめんだけ見ればすごく青春っぽいじゃないか。

僕と遠藤では青春もへったくれもないものだが、学校という日常を離れた特殊なシチュエーションでの二人きりという事実が変わりはない。

ここでの立ち回り如何では、遠藤と仲良くなることも可能ではないだろうか。

「なあ、遠藤」

「……なによ」

恥ずかしいポーズを披露した直後だからだろう、彼女の顔は真っ赤だった。僕は何もしていないのに、なんだか申し訳ない気持ちにさせられる表情だな。

「ご趣味は？」

「お見合いかっ！」

怒られた。

「お見合いじゃないよっ！」

「知ってるから！黙ろう一回黙ろう！」

あらぬ誤解を解こうと試みるも、余計に怒りを深くしてしまったらしい。黙して語るなどはなんたる。ただまあ、幸いにも誤解だけは解け――――

「……ん？」

「何か言ったっ!？」

「いえ何もっ！」

何やらぴりぴりしているな。「お見合いつて……結婚前提じゃない。早すぎる、早すぎるわ……!」

遠藤は何かぼそぼそと呟いているようだけど、うまく聞き取れない。
い。

いやいやそうではない。今僕は恐らく結構大事なことに気が付いた。即ち、遠藤が僕を嫌っているのは何かしら過去に不幸な誤解があつてのことではないかということだ。

考えてみればそうだ。

遠藤ほど性格も面倒見も良い人間が、僕に対してだけ親の仇もかくやというような接し方をするのには何か大きな理由があるに違いない。

ならばその誤解を解くことが、取りも直さず遠藤と仲良くなるための第一歩になるはずだ。

「……遠藤」

「なによっ！」

「僕はさ、遠藤。君と仲良くなりたいんだ」

「え……………は？」

「だけど遠藤は僕のことを、きら……………あー、あまり好ましく思っていないのも分かってる。多分、この気持ちは勝手な一方通行なんだろうな」

「うえ？ な、なに言って……………」

「それでも僕は君のことが（一人の人間として）好きだ！（友達として）真剣に付き合っていきたいと思ってる！」

「えええ————！？」

のけ反るほど驚くなんてらしくないぞ遠藤。

顔はますます真っ赤になっているし、恥ずかしいのではなく風邪でもひいているのだろうか？

……心配だけど、ここで一気に畳み掛けさせてもらおう。

全てはあらぬ誤解を解かんとために！^お降り来せ^{ここ}天祐^{てんゆう}寄るまじ喜劇！

「きつと何か……何か、不幸な誤解があったに違いないよ！そうでもなければ遠藤みたいな人格者が毎日ガンづけしてくるわけないし！」

「そ、そうなの私も意地……え？ガン？」

「3日に1回も授業中にゴミを投げ付けてくるわけないし！」

「ゴミを投げ……ってもしかして……手紙のこと？」

「だから話をしよう！そして全ての行き違いを解消して————
—僕と友達になってください！」

僕は両腕をばっ！と開いて胸を開いた。かかってこい遠藤！僕が―――友達が相手だ！

「友達……？なにこれそっち？友達？え、うわ、こいつ怖い」

しかし、遠藤の反応は僕の予想から大きくかけ離れていた。

「……………帰る」

冷たくそう言い放ち、くるりと背を向けて海から去って行ってしまったのだ。

「え？ちょ、ちょっと！」

僕は急いでその背中を追いかけた。

なぜ遠藤が急に怒り出したのか、なぜ女の子の怒った姿はこんなにも焦燥感を駆り立てるのか、よくは分からないけれどとにかく走る。走る。

すると防波堤を越えた先、砂浜からはちょうど死角になっていたらしい道路の真ん中に、遠藤唯加は立っていた。

「……まだ何かあるの？」

相対した僕に、不機嫌そうな顔で言う。

遠藤の目は、「実は今までってにらんでなかったんじゃない……？」
と思わせるほどに鋭い。

「えーっと、……ごめん。何か気に障ることを言っただけで……」

僕がそう言って謝ると、

「理由も分からないのに謝らないでよ！とりあえず、っていうその
姿勢の方が不誠実に感じるから！」

「ご説ごもつとも。だけど、

「だけど、僕は遠藤の笑ってる顔の方が好きなんだよ！今みたいに
怒ってる顔じゃなくて、いつもみたいにぶすつとした顔じゃなくて
！他のみんなと楽しそうに喋ってる、そういう時の遠藤の方が好き
なんだからしょうがないじゃないか！そのためなら謝る！とりあえ
ずでもいい加減でも！」

ああ、何だかうまくまとまらない。

思考するスペースの大部分が何かでふさがっていて、余りのちょ
っとしか機能していないような、変なもどかしさ。だけど多分、要
するに、

「僕は君が僕の前でも笑うようにしてみせる！」

要するに、今の僕は彼女のもっと側に行くためにあらゆる事ができるのだ。

これが友情の発露なのか、恋の予兆なのかは判然としない。多分どちらでもいいんだろう。

「……………」

遠藤唯加は呆氣にとられているようだった。無理もない、僕は普段こんなに激するような人間ではない。

遠藤の顔はみるみる紅潮していった。それにつれて体は小刻みに震えはじめ、目尻には涙がたまる。僕をきっとにらんで、遠藤は言った。

「……いいわ。だったらあんたの覚悟を試してあげる、姫野。この――」

遠藤はかばんをこそこそやりだした。その瞳はさっきまでとは打って変わってきらきらと輝いている。そして、それが取り出された。

「この、“交換日記”でねッ！」

じゃじゃーん、という音が聞こえてきそうなくらいに得意げな遠藤。その右手には無機質な達筆で“こうかんのーと”とあるパステルカラーのノートがあった。

「Oh……」

僕は何も言えなかった。斜め上すぎて。さっきまでの熱い気持ちには風船がついていたらしい。空に飛んで行ってもう見えない。

そんな僕に気付く様子もなく、遠藤はどないや、もとい自信満々な顔で笑っている。

やめて！そんな綺麗な目で見ないで！

「さあ！そうと決まれば早速細かいルールを決めるわよ！」

遠藤は意気揚々と駅舎に向かって歩き出す。

「一日交代でー、ノルマは見開き半ページでー」

指を折って一つ一つアイディアを口にする。足元で砂がざく、ざくと音を立てる。

「あ、次の人のために必ず一つネタを振っ……ってちょっと姫野！
ぼーっとしてないで早く来てよ！」

そう言って振り向いた遠藤の表情は、すっかり昇った陽光に映えて————ちょうど僕が見たいと言ったそれだった。

（後書き）

本編で語れていませんが、この日まで遠藤さんは姫野くんから嫌われていると思ってました。日頃からまわした手紙はスルーされ、目が合っても速攻そらされていれば当然の帰結です。遠藤さん可哀相ですが睨んでいるのは本当なので、3分の1くらいは自業自得かと。

交換ノートはたまたま持っていたわけではなく、たまに取り出して姫野くんとやり取りを妄想してにやにやする用に常に携行しています。これも物語内で説明できてません。我が腕ながらあちゃー…
そういうわけで、遠藤さんは設定上わりとアレな人ですw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7264v/>

とある朝ぼけ、遅刻した日の話

2011年10月9日12時28分発行